

看護職部門

七色(なないろ)の手

たぐち まき
【田口 真紀・岡山県】



入選

外来通院のおじいちゃんと手をつないだ孫がバイバイと診療室を出る。そんな光景を目にすると、10年ほど前、がんで余命3カ月だった男性患者との思い出がよみがえる。ベッドで長女の孫を抱いて過ごす顔は、いつでもおじいちゃんスマイルだった。外泊に向けて点滴の交換方法を練習する長女は、父親が残された時間を孫たちと笑顔で過ごせることをいつも願っていた。

長女は外泊の日、個人タクシーを営んでいる父親の愛車で出迎えた。親子のやりとりから、初めて娘に愛車の運転を任せることが分かった。長女は心配気味の父親を「お客さんはお静かに」と笑いながらなだめた。私が「ゆっくりしてきてくださいね」と、手を振ると彼も手を振り、親子3人が乗った車は発進していった。

当時、彼の孫と私の娘は同い年だった。娘の小さな手と自分の手を重ねた時の喜び、幸せ。そうだ！ 家族の記念に「手形」を残そう。きっといつの日か、おじいちゃんの手感触を懐かしく思う日が来るように…。私の思いを長女に伝えた。数日後、1泊2日の外泊から戻ってくると、彼は言った。「孫の手はちっちょうてカワイインじゃ」と、家族で手形をとった話を聞かせてくれた。そして、おじいちゃんの喜びに満ちた笑顔を見せてくれた。

彼が亡くなり、半年たったころに、私が娘を連れて彼の家を訪ねると、色とりどりの手形を押した画用紙が仏壇に飾ってあった。長女と孫たちの小さな手が、彼と妻の手を丸く囲み、家族の心は「七色の手」でつながっていた。娘を抱いて眺めていると、おじいちゃんスマイルで手を振る彼の姿が見えたような気がした。

10年前に出会った家族の絆から、看護するという喜びを教わった。看護学校を卒業して25年、「七色の手」は、これからもずっと、私を支え、応援し続けてくれるのではないと思う。